若越郷土研究

9の1

矢代の手杵祭（遺稿）

――福井県遠敷郡内外海村矢代の春の神事――

錦　耕　三

「若狭風俗問状答」にもすでに記されており、遠敷郡地方では〃矢代の観音まつり〃とか〃手杵祭〃と呼んで相当有名になつているが、交通不便の磯辺の村落であるためか、見物に出かける人もあまり多くない。朝日新聞福井版――昭和十七年四月五日――に奇祭殺人祭の見出しで報道されたことがあつた。しかしこの報道も興味本位の記述で読者からは直ぐ忘れられてしまう程度だつたが、村人達はこの記事に限りない憤りを今も抱いている。人を殺して財宝を奪つたというあまり名誉でない伝説を事実あつたこととして信じているだけにその腹立ちは大きかつたに違いない。中山太郎氏の「諸国風俗問状答」の註に〃この伝説は後人の附会としか考えられぬ。杵舞の古い相が忘れられて、とんでもない伝説が附会されたのである。〃とあるが、矢代の村人達はこうした解説のあることを知つたら矢張り憤慨するだろうと思うほど純な信仰を今もこの神事につないでいるのである。それだけに相当形のくづれた神事ながら役者三人の扮装――歯朶の葉のかつらを冠り顔は墨で隈どつている異様さにも古い信仰の形だけでも偲ばれると思う。「若狭風俗問状答」や中山太郎氏の「日本民俗学辞典」にすでに紹介されているけれど、もう一度こうした民俗を見直して慾しいと思うのである。

一　神事と伝説

観音堂縁起――昔（今から約千八百年前のことだつた、と村人は語つている）矢代（ヤシロ）と阿納（アノ）の沖に一艘の漂流船が流れていた。両村の人達がそれ〴〵自分の方へこの船を招きよせたところ、阿納の方へは行かずに矢代の浜辺に流れ着いた。船には唐（モロコシ）の王女と八人の女蔦が乗つており、一体の観音像を護持しているほか八人の女蔦は頭の上に金袋（カネブクロ）を冠つていた。村人達はその金が慾しくなつて悪心を起しその女達を殺してしまつた。恰度三月の節句の日で村では家毎に餅をついていたがその杵で女達を叩き殺したのち金袋の財宝をすつかり奪つた。ところが間もなく村に悪疫が流行り出した。祈祷をしても何の効果も見えなかつたので、村人達は唐船の事件を思出して、その亡魂の祟りだ、ということに気がついた。そこで王女の護持していた観音像を祀ろうということに話が定まつて女蔦達が乗つていた船材でお堂を建て観音像を祀るとともに王女を辨天様として祀つた。観音堂境内の入口にある小さな祠がその辨天様だと伝えている。

毎年の雛の節句の日には唐船を襲撃した時の村人の変装をそのまゝに今も村人達は歯朶の葉のかつらを冠り、顔を墨で隈どり、手杵を持つて観音堂の前で女蔦達を殺す真似をし、〃てんしよ舟の着きたるぞ福徳や〃と唄うのであつてこれが矢代の手杵祭の起源だというている。――「福井県の伝説」参照――

当時の観音堂は三百年餘前に火災で焼失

したので、その後再建したものが現在の観音堂というており、本尊の観音像は今も本尊仏として残つているという。現在安置の仏像の胴中に安置してあるのだそうである。また唐船漂着の古記録なども三百年前の火事の時に焼滅してしまうたとも伝えている。

源三位頼政の鵺退治――矢代浦はもと稲富浦というたもので源頼政の領地だつた。昔、天皇様が不思議な御病気にかかられたがそれは怪物が毎晩現われ御所をあらしに来るからだということになつてその怪物退治の命令が頼政に下つた。或夜のこと、観音様が頼政の夢枕にたち、〃おまえの領地の稲富村の観音である。怪物を退治したいと思うなら願をかけに来い〃というお告げがあつた。頼政は七日七夜観音堂にお籠りして祈願をこめたところ〃山鳥の羽をとつてそれで矢羽を作り怪物を射よ〃とのお告げがあつた。そこで早速稲富村の山中で山鳥を捕えて羽をとり、また宮川村の竹籔で矢竹をとつて矢を作り目的を達したのでそのお礼として稲富村の一部と外面の方面を観音様に奉納した。それ以後稲富を矢代というようになつたし、矢代の人達は山鳥を食わないことにしているという。（「福井県の伝説」より）

さらにまた怪物の鵺というのも正体は頼政の母親で自分の息子に手柄をあげさせるため自分が怪物となり矢代の観音さんの力添えによつて退治する方法を教えたのだと村人達は伝えている。頼政は最初矢代の東方のトヒガ岳に舘をかまえていたのだというし、宮川村には頼政を祀つた堂がある。

頼政の伝説はさらに成長してその息女二条院讃岐姫にまで及んでいる。後に平清盛の讒言によつて讃岐姫が配流された田鳥浦は矢代の東方約一里半、今では同じ内外海村の大字である。不運を泣き佗びて讃岐姫が詠んだという

我が袖は　潮干に見えぬ沖の石の　人こそ知らね　乾くまもなし

の沖の石は田鳥の沖あい一里のところにある。讃岐姫はこゝで死んだといわれ火葬に附した跡という場所もあり、なぐさまぬその霊を祀つた釣姫神社が田鳥小字釣姫にある。また讃岐姫の住居跡は釣姫の西にあつて御所平とよび里人は今も女子がその附近に入ることを禁じているという。

二　祭にたずさわる人

〔禰宜〕　大禰宜、小禰宜の二人がいる。手杵祭をはじめ、部落のすべての神まつりの主担者であり、大禰宜の責任と権利は殊に重大である。当番制で、現在大禰宜、小禰宜いづれも一年交替である。小禰宜を勤めた者が大禰宜に昇格する。以前は両方とも任期が二年であつて小禰宜になると四年間勤めねばならなかつたわけであつたが、現在は一年ずつ二年勤めて長老組に入ることになつている。選定は大体年齢順である。しかし若者組の中で手杵祭の神事にたずさわつた者で夫婦揃つている者でなければ禰宜になる資格は出来ない。十年ぐらい前までは他部落からの移住者や、養子は禰宜になれなかつた。今ではこの規則は厳重でなくなつたというが、交通の不便な山坂数里を越えて行かねばならぬ片田舎の矢代へ移住して来る家もなさそうである。帳屋内の囲炉裡の横座には大禰宜が坐り、その左側に（女座か）小禰宜が坐る。この座席は相当厳重である。

禰宜の物忌みは現在も厳しく守られている。祭の度毎に着る装束や手杵祭の役者三人の装束――黒の素袍で袖に二本の松葉ち

がいの紋、背なかに葵の紋がある――も禰宜二人が麻を培つて自分の手で晒し織つて染め、作るのだという。（訊きたださなかつたけれど、装束は代々の禰宜が作るのでなく使用に堪えなくなつた時作るのではないかと思われる。）このほか禰宜は自分の家の煤さえ払うことが出来ないとされ、肥（コエ）に触れることは当然忌んでいる。元旦の行事である「弓矢神事」を行う前、即ち午前四時ごろの夜のひきあけに社の前の谷川で水垢離をとつてから炉にあたたまつてのち装束をつける。装束を着てしまうと便所へは絶体に行くことが出来ない。

禰宜の勤めは神社の建物の掃除、境内の掃除、冬には除雪作業をやらなければならぬ。若し神社の建物が雪のために倒壊すると村には非常な災害があると信じられ、禰宜の責任になる。村に災害があつたり、その他災害が起ると禰宜の信仰心が足らぬからだと村人から非難されるし、それだけに禰宜の物忌みは厳重にやらなければならぬのであつて苟も禰宜の物忌みや勤めについて村人達の非難をうけることは〃死ぬ以上につらい〃といわれている。また祭々によつて幕を張つたり、注連縄を飾つたり、神殿の扉をあけたり、祭に必要なものは一切禰宜が作ることになつている。手杵祭に使われる歯朶の葉のかつらや襷の縄など全部禰宜の手で作る。

〔手杵祭に参与する者〕

◇役者――手杵棒振り一人、弓矢持ち二人でこれを三役ともいうている。村の中老組から選定、毎年元日の神事の日に人選する。服装は歯朶の葉三枚合せのかつらを冠り、鼻の下のヒゲと眉と頬とを墨でえどつており、恰度歌舞伎十八番の「暫」の隈どりに似ている。黒の素袍を着し手杵棒振りだけが所作を行う時袴の股だちをあげている。手杵は二尺五寸ぐらいの長さの手杵でかなりの目方がある。何の木で作つてあるのか、大工に訊ねても訣らないと村人が説明してくれた。これもやはりその昔の唐船の材で作つたのだとも語つている。弓矢はカブラ矢とサスマタ矢の二本、どちらも六尺ぐらいの長さで木で作つてある。役者はこれを右脇にかかえこむようにして持つ。なおこの矢は頼政の鵺退治の時観音のお告げによつて作つたのに因むと伝えている。足も草履もはかず足袋はだしのまゝで所作を行う。

◇唐船丸舁き――唐船丸はトウセンマルと訓む。長さ一間（ケン）ぐらい、幅二尺ほどの木の小船で赤や黄色の旗を幾本となく船の中に立てる。「唐船丸」と記したもの、「奉納子安観音」と記した幟もある。船を舁くものは若者六人で袴を着用、草履ははかず、跣足のままで行列に従う。若者の中でも年かさの者がこの役になる。船は舁くというより、提げるというた方が適切で、三人ずつ船の両側に立ち、布切を船の縁（エン）に巻いてその布切を提げている。

◇女蔦――五歳ぐらいから十四五歳ぐらいまでの穢れのない少女を選ぶ。大禰宜の妻が少女の家へ今年の女蔦を勤めてくれと頼みに行く。これも大体順番で今年はあの家の娘というやうに定めている。矢代は二十戸の部落だから八人の少女を選定するのに紛争は起らず、観音信仰もあついので問題なく人選されるらしい。女蔦の服装は振袖、頭には大黒頭巾のような金袋をかぶる。金袋はたてに赤と白に斑に染めたもの。これは唐船の女蔦の姿に形どつたもので、金袋も唐船の女蔦が頭に戴いていたのになぞらえてあるのだという。

◇大太鼓打ち――前後から大太鼓を舁ぎ、

太鼓打ちは横から打ちながら進行する。太鼓打ちは若者中の最年少者である。ジンクが始まる前に裃の上をはずして赤の太襷を十文字にかけ太鼓を打ちならす。

◇笹持ち――国民学校の児童（男子）が勤める。

◇若者――神事にたずさわる若者は全部戸主の若者（長男の意味か）が勤める定めである。

三　神事の順序

◇毎年旧暦三月三日に行うていたが昭和十八年から新暦にあらため一ケ月遅れの四月三日に定めている。

◇祭の準備――大禰宜、小禰宜がすべてを支配している。前の月の晦日から始める。神事に参加する者全部が部落の氏神社（加茂社）の帳屋に集まつてジンクの稽古を行う。これをナラシというている。

◇エマツリ――神事の前日をエマツリというている。現在の村人の考え方ではこの日から神事に入るとしており、ナラシの始まる日から祭に入るとは思つていないらしい。この日の午前中に禰宜二人は帳屋につめかけ、大禰宜は神殿、拝殿の掃除をし、小禰宜は歯朶の葉のかつらや注連縄をつくる。午後になると大禰宜は羽織袴で部落の墓地にあるチンジさん（鎮守様か）に参拝しお燈明をあげて来る。村の浜辺から小舟に乗つて行くがお供として神事に参加する若者二人（数年前までは四人だつたが戦争のため若者達が応召したので二人に減らした）が櫓と櫂を操つる。若者の服装は褻（ケ）の仕事衣である。お燈明をあげて帰つて来ると供の若者は直ちに家へ帰つて羽織袴に着かえて来て浜辺に立つて〃神事にあがらつしやい〃と二声か三声、大声で村中へ聞えるように叫ぶ。この声を聞くと里の人達は観音堂の石段をあがつた片脇の小祠――天神様と辨天様の二つの祠がある。椎の巨木の根元におかれてある。――の前に集つて来る。こゝで先ずお神酒三献をまわす盃事が行われる。これが終ると区長から翌日の神事の役割をいい渡すが、これは形式だけであつて役割はすでに正月の神事の時に定まつている。役割をいい渡された者は〃しつかり勤めます〃と誓つてこの日の神事を終る。なおこの日の盃事と祭当日の盃事の際にお神酒をついでまわるのは墓地のチンジ様にお燈明をあげに行つた若者が勤める。またエマツリの日にはすでに近在の人達が見に来るのでジンクのナラシは行わない。ジンクの文句は他所の人々に知つてしまわれると霊力を失つてしまうと信じられている。里人が抱いているジンクの神秘を護ろうとする意志や信仰は現在も極めて固いようである。

◇祭の日の神事――この祭はどんなことがあつても午前中に終らねばならぬとされている。普通は朝の八時ごろには始められる。先ず観音堂で和尚（矢代の観音堂は遠敷村金屋真言宗万徳寺の所管になつている）を中央にして八人の女髏を除いた神役全部が座席につき、盃を三献まわす。肴はこの日の御供〃ヘラ藻の味噌あえ〃である。これが終ると僧侶は帰つてしまい、神役一同は氏神社の帳屋へ移る。観音堂と氏神加茂社とは小さな谷を隔てた向い合せの位置でほんの目と鼻の間という近さである。

帳屋でも盃を三献まわす。座席は床の方に向つて右が大禰宜、小禰宜。左側に区長。神役の人達は小禰宜の下座から鍵の手になつて坐り、すでに禰宜を勤めた長老達が区長の下座につづいて座席をとる。こゝでの盃が終ると大禰宜からこの日の役割を

正式に指名する。こうしている間に神職の祭典が行われる。神職は兼務で他の村から来る。村の若者が船で迎えに行く習わしである。神饌は青物、小鯛、鯣、一升どりの二個の鏡餅、昆布、籾、塩で大禰宜が手長の役を勤め神職に渡して神前に供える。

帳屋の方では一切の準備がとゝのうと祭典中であつても太鼓を打ちならす。大太鼓がなるとたとい神職が祝詞奏上中であつても、祭典を中止して大禰宜、小禰宜、区長、長老らは拝殿から帳屋へ戻つて来る。大太鼓の囃子で音頭とりがジンクをうたい出す。一句一句をうたつて一同がそれにつづけて斉唱する。このジンクのうた声に合せて役者三人の扮装が行われるのである。帳屋内では一同が総立ちでジンクをうたう。唐船丸舁きの若者はジンクに合せながら所持の布切を船の縁にとりつけて周囲からその布切をひきつけるようにひつぱりつつ少しずつ船をゆり動かせて船の位置を少しずつ、移動させる。その音の唐船漂着のさまをかたどつているらしい。役者三人の隈どりは墨で鼻の下のヒゲと眉と頬をえどる。恰度歌舞伎十八番の暫の隈どりに似ていることはすでに記したとおりである。隈どりが終つて歯朶のかつらを頭に冠り、縄で十文字に襷かけをする。女薦役の少女八人も赤白班の金袋を頭に戴く。これらの扮装をしている間は太鼓の囃子でジンクをうたいつゞけ、扮装をしている間は太鼓の囃子でジンクをうたいつゞけ、扮装が終ると直ちにジンクをやめてしまう。これから芸能が始められる。

◇神事芸能――矢代の手杵祭は、現在ではもう完全な芸能とはいえない程単純なものになつている。以前はもつと複雑なものであつたらしく、「トウセン丸」を中心に「唐船の着きたるぞ、福徳ぞ、幸ぞ」と唄いながら踊つたといわれている。

まづ主役の手杵棒振りが手杵を持つて帳屋を出ると、つゞいて弓矢持ち二人が出て来る。このあとに唐船丸――若者六人が桙をつけて両側からさげながら持つて歩く――八人の女薦、大太鼓、笹持ちの順番で帳屋を出る。全部の神役が帳屋を出ると手杵棒振りを先登にして拝殿に向い左側から神殿の石段を登り、同じく左側から神殿の後方に入つて行列は暫く止る。手杵棒振り一人が神殿の右側から現われ、石段を下り石段の右側で立止つて左足片方を石段の最下段にかけながら帳屋の方へ上半身をむけ手杵の片端を両手で持ち、左肩上にかまえる。（ちよつと野球の打者の構えに似ている）この身振りで二三分間、見物の方を睨むような形をする。つゞいて手杵を左肩にかざしたまゝ帳屋の前に立ちならぶ見物人すれ〳〵に走り出し拝殿の真正面まで走つて拝殿の階段まで進みそこで止る。拝殿の正面では、拝殿階段の左側（向つて）に立つて右手で手杵を前に突立てる。この時は力まかせにして地面に突立てる。左足を膝を曲げたまゝあげ力士が四股をふむように力足を踏み、つゞいて右足でも力足を踏む。さらに拝殿階段の右側でも左足、右足で力足を踏み、拝殿の真正面に立つてもう一度左右両足で力足を踏む。拝殿正面での力足を踏み終ると両足をひろげたまゝ手杵を横にし両手で頭上にさしあげ軽く前方へ手杵を投げる。左足から三足半前に進んで左手でゆるやかに手杵を拾い地面に突立て手杵の頂上を左の掌で押える。つゞいて左手の上へ右手を重ね、左手を抜き、右手の上へ左手をのせ右手を抜き、左手の上に重ね再び左手を抜きさらに左手を右手の上に重ねてから静かに神殿に向つて拝礼する。

拝礼が終ると手杵棒振りは拝殿の左側から神殿の後方へ退場するがそれまでは弓矢持ち以下の行列は神殿後方で待つている。手杵棒振りが退場すると弓矢持ち二人が拝殿の正面に出場し、一間ほど間隔をおいて両方から礼を交したのちサスマタの矢とカブラ矢の先を地面の上で触れ合す。矢の先の合う地点は恰度神殿の中央、正中にあたつている。カブラ矢が拝殿に向つて左側、サスマタ矢が右側である。矢の先を触れ合すと弓矢持ちが退場し、唐船丸、女鬼、太鼓、笹持ちの順で行列が進行を始める。この時太鼓はゆるやかにドンドンドンとならしながら進行する。行列が大体一周し終つた頃に再び手杵棒振りが神殿の右側から現われ、石段右側の最下段に左足をかけて手杵を左肩にふりかぶる。そして前回と同じ所作を行うが全部で三回行われる。弓矢持ち以下の行動も前と同じことを繰返す。三回目が終ると手杵棒振りは神殿の石段を登らずに帳屋の前を静かに歩み、境内の入口、参道へ下る石段の上に立つて拝殿正面で行つた所作を行い、参道を下つて行く。その間に拝殿正面では弓矢持ちが所作を行つて手杵棒振りのあとを追い参道石段上でやはり所作を行つてのち手杵棒振り、カブラ矢、サスマタ矢の順番で参道を静かに歩み、参道一ノ鳥居（観音堂へ登る石段は一ノ鳥居のところに築いてある）を出て観音堂へ登る石段下で所作を行う。弓矢持ち以下の行列がこれにつゞく。こうして観音堂の石段を登つたところでも所作を行い観音堂の左から堂の後方へ入る。行列が全部堂の後方へ入ると、こゝでも堂の右側から手杵棒振り、弓矢持ちが堂の正面で加茂社の如く三回所作を行う。所作一回毎に唐船丸、女鬼、大太鼓、笹持ちの行列が太鼓をならしながら前と同じく行進する。観音堂の所作が終ると一同帳屋にひきあげ芸能を終る。

◇会食――帳屋へ引揚げると、こゝで扮装を解いて会食する。献立は定まつておらず、皆の持寄りであり、お神酒を祝うが盃の肴はやはり〃ヘラ藻の味噌あえ〃である。なお神事の費用は部落の負担となつている。

四　ジンク

ジンクは神句と書くのか、甚句と書くのか訣らない。すでに記した通り他の部落へジンクの文句の洩れることを非常に嫌つている。このジンクが完全に唄えることは部落の人間になりきるということらしい。

若者達のジンクの稽古は神社の帳屋で行うが、長老組や経験者が指導にあたる。前月（三月）の三十日からナラシが始まるが夜の八時ごろから十二時ごろまでかゝつて行う。

以上のような理由からジンクの文句を知ることは困難だが、特別の好意で小禰宜の藪本浅吉さんがうたつてくれたのをノートに控えたが藪本さんは〃昔はこの祭（手杵祭のこと）にだけでも酒二斗ほどを使つた。ジンクは酒を飲んだ元気と祭の時でないとどうも調子が出て来ないものだ。今では酒もないし、祭も簡略になつて寂しうなつた。〃と話しながら小声でうたつて呉れたがやはり調子が出ないのか、ちよい〳〵ゆきずまつていた。これが完全な採取だとは思えないが参考のために記しておく。なお音頭としてあるのは音頭とりがうたう文句、音頭につゞけて全員がうたう詞をツケ（附）というているので附としておいた。

（音頭）
エー　エー　ヤンラーア
ハン　ハン　ハンエー

（附）
ヤン　ハーアア　シラメタリヤー
ハンハー　ハハンエー
（音頭）
エー　エイ　ヤンラーア
ハン　ハハ　ハンエー
ハハンハハ　コレハタイセン　エー
ハン　ハハンエー
（附）
ヤサコサ　ハ　ヨーイヤナー
（音頭）
ワカイシユサーマーガーター
ヘウシ　ソロイテ　ターノミマース
（附）
ハンハー　シターカヨー
ヨイトコ　ヨイトコナー
（註）以上さいれいの歌という。これから以後の文句がジンクで、役者の扮装はジンクが始まつてからかかる。
（音頭）
コーイガー　ナークートモ　チトウタヒ
マセウ　アートノ　ツケゴエ　シカリト
タノム
（声がなくともちとうたいましよう。あとの附声しかりと頼む）

（註）これ以後一節づつ音頭について附句がうたう。
コンド　ナガサキ　エビヤノジンク
オヤノダイカラ　コマモノウリデー
（今度長崎エビヤのジンク、親の代から小間物売りで）
イマハ　コマモノウリヤヲ　ヤメテ　オウサカガヨヒノ　フナノリ　ハジメ
（今は小間物売屋をやめて、大阪通いの船乗りはじめ）
ソノヤナカニハ　ナニナニ　ツムゾ　シマヤモメンヲ　シタニトツンテ
（そのや中には何々積むぞ。縞や木綿を下荷と積んで）
アヤヤニシキヲ　ナカニトツンデ　ヨロヅコマモノウハニトツンデ　サーサユキマセウ　オウサカノハマヘ
（綾や錦を中荷と積んで、萬小間物上荷と積んで、さあさ行きましよう大阪の浜へ）
（註）このあとの文句があるのかないのか、藪本さんはこの辺まで来ると役者の扮装も出来上るというている。仮名書きのあとの括孤内の漢字まじりの文句は筆者の判断であつて、仮名のまゝ点を附したのは意味の理会出来ないもの。

五　その他

◇あまり名誉でもないこの手杵祭の由来説話を実際にあつたことと信じている。この採集にいろ〳〵説明して下さつた小禰宜の藪本さん（この採集当時の小禰宜である）も〃こんなことをいうたら貴方がたはおかしく思うかも知れないが、わしらは唐船の女薦を殺して宝を奪つたことは本当にこの村の先祖らがやつたことだと思うている。〃と語つていた。

「若狭風俗問状答」には
「村の者どもいひ合せ杵にてうちころし、船中の宝財を奪取したがその後村中大に疫癘流行し、村民大半死亡せし故、その女の霊を観音と崇め懺悔の為其様を成せしかば疫癘止みしとぞ、その後先祖の悪行を真似びて祭とするを恥てやめしかば疫癘また大に行はれける故、再び祭をなす事元の如し、此祭を民俗手杵祭といふ」
と記している。先祖の行為を恥じて祭をやめると再び悪疫が流行つたので祭を復興したというのである。村人からはそんな話も聞かなかつた。考えてみると、一度やめた

祭を再び行うようになつたというのはあまりに説明くさいような気もする。ともかく今も村人達はこの伝説を本当にあつたことと信じている。

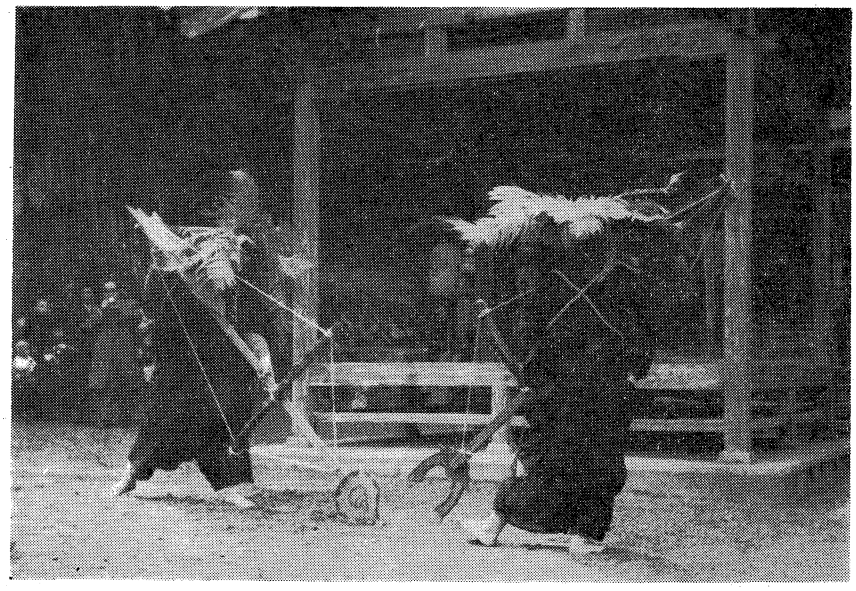
◇手杵祭という名称は「若狭風俗問状答」にも記しているから矢代附近の村々では早くから「手杵祭」というていたかも知れない。しかし現在のところ、近郷の人達も「観音さんの祭」という人が多く、矢代では「雛まつり」と称している。この記録では「手杵祭」というのが一番ふさわしく思われるので使用したまでゝある。

◇この祭と直接の関係がないけれど讃岐姫の話に糸をひいているような気がしてならない。讃岐姫については「神事と伝説」の章で記したとおり、清盛の讒によつて田烏浦に配流の身となつた。その住居は田烏の西の御所平でそこで死んだ。火葬に附した跡も釣姫（ツルベと訓む。田烏の小字である）にあり、なぐさまぬ姫の霊を祀つた社が釣姫にある釣姫神社でかつては釣姫大明神と称していた。これは明らかに御霊信仰の社である。讃岐姫関係の文書があつたというが釣姫の部落には昭和十八年三月四日に火事があつて全部落十八戸のうち十三戸まで焼失し、文書などもその際焼けてしまつたといわれている。「越前若狭古文書選」に珍しい記録としてあげている田烏の秦氏の家に残つている「秦守高注進状」に〃さぬきの尼御前のあとなりとて、宮河地頭殿可三知行一由度々沙汰候いしかとて今以て田烏浦いろはず候き。さぬきの尼御前の御子息も黒崎山上をばかりもせられず候き〃とあり文永八年十二月二十九日の文書である。この当時すでに讃岐姫の話がこの村に根を下し、沖の石の歌にまで成長していたことが想像される。吉田東伍氏は「沖の石」の地名についてこの伝説を附会の言として一笑に附して了うているが讃岐という尼御前がこの土地に関係していること、御霊信仰があること、これが観音の信仰とも結びつき、唐船の伝説や源三位頼政の鵺退治の伝説がこの土地に根を下したのと関聯性があるかも知れないと思われるので記しておいたわけ。なお矢代では頼政の鵺退治の功労によつて朝廷から褒美として宮河村の天神河原の八反八畝の田地を矢代村へ賜わつたのだとも伝えている。鵺という化物は顔は猿、尾は蛇で胴は猫だつたというている。

◇「福井県の伝説」――鯖江女子師範郷土研究会編輯――には〃てんしよ船のつきたるぞ福徳や〃と唄つて村人達が舞うのだと記しているし、北尾鐐之助氏も「若狭紀行」にこれを述べている。しかし実際の神事ではこんなうたはうたつていない。或はジンクの文句かも知れないがジンクとはあまりにも詞の調子が異なつているし、ジンクを唱える時は舞うているのではないのだからもう現在の神事ではこのうたと舞が脱落してしまうたのかも訣らない。

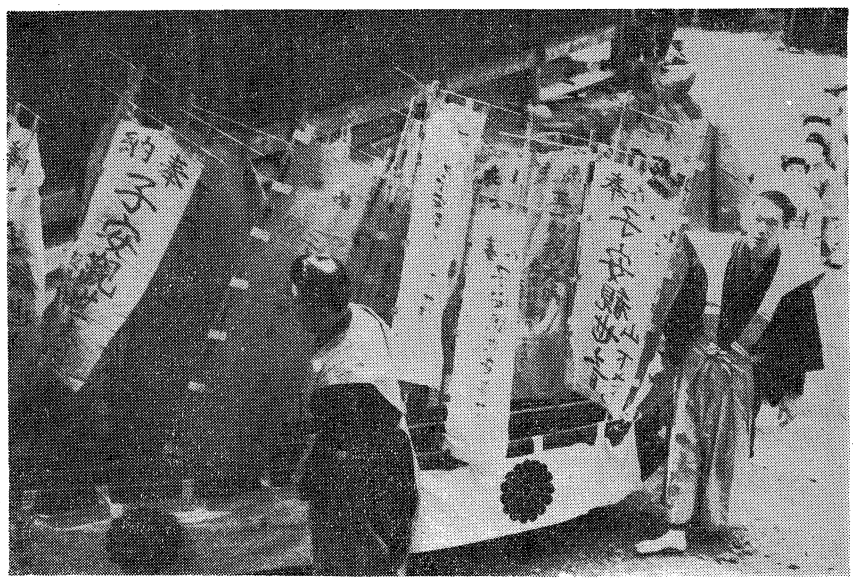
〃今ではこの祭も寂しうなつてな、たゞ行列をやるだけです。以前はお能もあがつたしそりや賑やかじやつた〃と藪本さんが語つているとおり、所作といえば役者三人が行うだけである。殊に弓矢持ちの如きはたゞカブラ矢とサスマタ矢を合せるのみで芸能というには乏しい感じがする。さらに三人の役者が所作を行う間は太鼓の囃子もなく、一切無言無音のうちに行われるのである。つぎつぎに昔の形が忘れられ、簡略され、後の世の合理化もあつて神事次第の変化というより崩れてしまうたのが現在の相といわれよう。さらに仏教の影響はこの祭を観音さんの祭というていることや子安

加茂神社の張屋に幕をはりめぐらし、うす暗い中で神役三人の扮装が、ジンクをうたいながら始まる。　小林一男撮影



拝殿の前で弓矢持がカブラ矢、サスマタを合せる。　小林一男撮影

八人の女竈たち。　　小林一男撮影



唐　船　丸。　　小林一男撮影

観音の信仰の習合していることはあまりにもはつきりしている事実である。念仏踊りの流れ、陰陽道――カブラ矢とサスマタ矢を合せる点――なども影響しているといわれるかも知れない。しかもその中からでも古い習わしの俤ともみられるのは役者の扮装であろう。歯朶の葉のかつらを冠つて顔を隈どるのはジンクのうた声によつて行われるなどにもうかゞえる。春の初めに祝福する神の姿の信仰は忘れられたが形だけは残つているのである。雛の節句の災厄をはらう思想もとけこんでいるようである。それともう一つ、八人の少女が扮する女臈のかぶつている金袋さえ糸をたぐつたゆけば興味のあることゝ思わざるを得なかつた。

◇漂着した唐船は丸木船だつたと村人は語つている。唐船の守本尊だつた観音像は現在安置の本尊仏の胴の中に祀つてあつて十七年目毎に開帳しているという。

◇矢代の観音は子安観音として近郷近在の信仰をあつめている。また矢代ではこの観音があるので昔から難産するものがないと信じている。手杵祭の日には近在の人達が参詣し、この日の御供の「ヘラ藻の味噌あえ」を戴いて帰つて妊婦に食べさせる。これを食べると産が軽いと信じられている。ヘラ藻はとつて来ると直ぐに茹で一ケ月間晒してから味噌であえるのである。

――昭和二十年四月三日採集――